

## 鄭叡筆『京郊名勝帖』の漢江図について

慶應義塾大学 石附 啓子

鄭叡(1676-1759)筆『京郊名勝帖』(韓国、澗松美術館)は、鄭叡が陽川県令として京畿道に赴任した際、親交する李秉淵に贈った画作を纏めた画帖である。本画帖には、首都ソウルを流れる漢江の名勝を幾場面にも分けて描いた漢江図が二組収載されている。その一組の、青緑山水画法を用いた漢江図の緻密で静謐な画趣は、金剛山図など速筆で淡彩を駆使した他の鄭叡作品とは趣を異にする。しかし漢江図について未だ具体的な検討はなされていない。本発表では李秉淵をはじめ、明清代の文物を受容し朝鮮の文芸活動を主導した文人の評価を踏まえ、『京郊名勝帖』に収載される漢江図を通して、鄭叡の実景表現の有り方について新たな位置付けを試みたい。とくに漢江という朝鮮の文人にとって身近な実景に、青緑山水画の画法、すなわち倣古や神仙の、現実から離れた仙境を表す画法を用いた意味について考察する。

漢江は朝鮮時代初期、王朝の平穏安泰を祈願する目的から文学に詠まれ、岸边では文人が契会を開き、その記録は契会図に描かれた。契会は次第に漢江における西湖や東湖、読書堂など特定の景勝が選好され、西湖など遠い中国の名勝と重ね合わせることもあった。朴銀順氏によれば契会図の図様は十六世紀以降、ほぼ定型化する。ここで鄭叡の漢江図に注目すると、朝鮮で描き継がれた契会図の構図の定型に連なる作例が多く確認される。

鄭叡は研究史上、朝鮮時代後期における「真景」図盛行の先駆として注目され、文人に膾炙した朝鮮の紀行文学や明清代の画譜に想を得て、金剛山など国内に実在する奇峰奇岩を速筆で数多く絵画化した点が高く評価されてきた。現存する鄭叡作品を見渡すと、漢江図に認められる精細な描写は少ない上、青緑山水画法を用いた作品はきわめて限定される。これら画趣の違いは奇峰の聳える山、悠然と流れる河という景観のみに起因するのではない。李秉淵と鄭叡が共有した漢江という場の文脈とも照応するのである。

文人の紀行録を紐解くと、金剛山については奇峰奇岩や登頂の達成感が強調される一方、漢江など江湖では視覚・味覚が充足し、その感慨を仙境に重ねる例が多いという特徴がみられる。そして青緑山水画を含む一組の漢江図に描かれた景観は、李秉淵と鄭叡が共有する場であったことがわかる。

鄭叡は赴任して離れた地で、仙境あるいは遠い中国の名勝および李秉淵と共有する記憶を、青緑山水画法を通して漢江の実景に重層的に表したのではないだろうか。漢江図は、朝鮮で綿々と育まれた契会の形に、文人の漢江に対する意識を、新しい明清代の青緑山水画法で表した作品であることを指摘したい。漢江図は鄭叡の画業を問い直すだけでなく、朝鮮時代後期の「真景」を捉え直す上でも重要な作品と考える。